

佳作

テーマ…医療と福祉、わたしの体験 『『生きる』と』—骨髄ドナーを体験して—

東京都・女子学院高等学校1年 吉本美歩

その時鳴った携帯は何となく出たくない嫌な予感がしていた。そしてそういう時の勘は嫌でも当たると改めて思った。

私の弟が白血病だと診断されたのは、今年の2月12日の深夜0時だった。約1週間前から風邪の症状のようなものを引き起こしており、ついに嘔吐(おうと)が始まったので心配になった母が救急で病院に連れて行ったところ、大病院に搬送され、母親付き添いの緊急入院となった。

その時の私はただ頭に？ばかりが浮かび、弟と母の入院セットを一人で用意しながら「大丈夫、大丈夫だよ、落ち着こう」とただひたすら自分を励ましていた。しかしその1週間後、遺伝子検査により、フィラデルフィア染色体陽性というリンパ性白血病でも非常にレアな、移植を早急に要するタイプの白血病であると発覚した。

母はそれから1カ月間泣き崩れ、父はなんとも言えない表情で、私は「これからどうしよう」の言葉だけが頭の半分を占めていた。移植を行うには一刻も早く骨髄ドナーを見つけなければならず、二人姉弟の姉である私からまずHLA検査を行った。なぜならば血縁者間の移植だとGVHD(移植片対宿主病)が一番安全に済むからだ。GVHDとは移植後、ドナーの骨髄が患者に生着した後に、患者からドナーへの拒否反応だ。検査結果は1週間後に出たのだが、奇跡と言っても過言ではないほどに私と弟の骨髄の型が全一致(フルマッチ)した。

しかし、親や祖父母が喜ぶ中、私は一人あまり喜ばなかった。確かに移植をして助かるならばそれ以上のことはないが、その助ける人が別に自分じゃなくてもいいんじゃないかと囁くもつ一人の自分がいた。でもそれをドナーとしてすべてが好条件の私が口に出すのは自分がひ

どく冷たい非道徳的な人間だと感じられ、喜ぶ家族の顔を見るとますます声には出せなかった。HLA一致の後に主治医により、骨髄採取手術の説明とドナー意思の確認を受けた。骨髄採取の際には全身麻酔をしてから腰の骨にボールペンの芯ほどの針を刺し、数mlの骨髄を採取する。それを100回ほど繰り返すのだ。手術中は事前に貯血した自己血400mlを輸血する。しかし手術後も腰の痛みは続くので1週間の入院が必要だと説明された。それを知りさらにドナーに対する恐怖心が芽生え、自分の感情をコントロールできなくなった。

そこで、臨床心理士の先生と話を重ね、実際に弟が闘病する小児病棟を見て私の気持ちに変化が生まれた。その先生と初めて話をした時に「美歩ちゃんもドナーにあまりなりたくないよね」と初めて私に寄り添った言葉をかけられ、気持ちが軽くなり、涙が止まらなくなった。その後病棟に行ったのだが、そこには赤子や4、5歳の子が多く、声を聞くと元気そうなのだが、姿を見ると髪がなかったり歩く時は点滴が3、4本繋がれたままなど、痛々しく、いたって健康で育ってきた私には衝撃的だった。生まれてからずっと入院している子や再発して何度も移植を受け、つらい抗がん剤治療に耐えている子を見ると、骨髄ドナーになるのがイヤだとは思わなくなっていた。むしろ人の命を唯一救える誇らしいことだと感じられた。

麻酔のお陰で手術の記憶はないが、私の腰には2カ所メスの跡があり、確かな腰の痛みを1カ月感じた。術後熱も歩けないほどの痛みも私の中では誇らしい思い出。今弟は移植を無事乗り越え生きている。9月の退院を控えて、とても元気にリハビリに励んでいる。私の体の一部がかげがえのない命を救った。

生きることは大変なことだと私は今回深く思った。同時に健康で何気なく生きている自分は恵まれているんだなとも思った。生きたくても生きられない人がいる。当たり前前日常を取り戻したくて必死にもがき苦しむ人がいる。私は当たり前前の日常に感謝して、自分のいる「今」を大事に、精一杯生きる。